

研究代表者 所属・職：国際福祉開発学部・助教

氏 名：カースティ 祖父江

研究課題名：外国人住民に役たつやさしい日本語の生活情報の作成と有用性評価

研究の目的

- 愛知県や知多半島で生活している「定住外国人」が増え続ける中、行政と地域住民の間のコミュニケーションが大きな課題となっている。
- 本研究は、子どもを東海市の学校に行かせる予定の定住外国人のための「やさしい日本語」の就学ガイドの作成を通して、日本の小学校生活をわかりやすく説明することを目的としている。さらに、ガイド作成過程での、有識者や定住外国人による評価と、その評価に基づいて改善する、というプロセスを実現することも目的である。

プロジェクト目標の達成状況・成果内容

- 2018年6月に、一橋大学の庵 功雄先生と面談をし、やさしい日本語の現状と課題について聞き取り調査をした。また、2018年の成人式に出た住民の5割が外国人だった新宿区の多文化共生プラザの所長と、東京都の「やさしい日本語」の取り組みについて面談をさせていただいた。
- 2018年7月に、日本福祉大学国際福祉開発学部の留学生に、東海市名和小学校の「入学の手引き」を評価して、わかりにくい表現や語彙を特定してもらった。それを元に、2018年9月に「入学の手引き」を「日日」（既存の日本語からやさしい日本語へ）翻訳した。翻訳されたものを「学校がわかる本」としてまとめた。
- 2018年12月から2019年1月の間、東海市教育委員会の方や東海市にある3つの小学校の教員、東海市国際交流協会の会長、愛知県の語学指導員、知多市のボランティア日本語教室のリーダーなどの有識者に評価をしてもらい、コメントや提案を反映した。
- 2018年2月中に「学校がわかる本」がさらにわかりやすくなるためにルビを振り、イラストな

どを追加し完成した。3月中に、「学校がわかる本」を東海市に納品する予定である。

優れた成果があがった点

- 庵先生のやさしい日本語に対する概念の一つは「情報量や文型を減らし、語彙を増やす」ことである。「学校がわかる本」では、保護者と教員の相互理解を深めるために、「給食」、「登校」などのような「小学校で使うことば」をピックアップし、わかりやすく説明する「用語集」を含むことにした。定住外国人の日本語の理解が深まり、学校と接する上でのストレスを軽減することが目標である。わかりやすい情報を提供するだけでなく、利用者の日本語教育にも貢献する資料は新しい取り組みであると考えられる。
- 「学校がわかる本」の暫定版に対して、有識者の評価は非常に高かったが、同時に的確な修正案なども提示いただき、修正を図ることができた。利用者による、実際の利用を通じての評価は今後いただきたいと考えている。

研究期間終了後の今後の展望

- 「学校がわかる本」を製本化し、東海市内の各小学校および関係者に配布予定である。4月以降、学校の現場で利用いただき、学校側および利用者(外国籍の保護者など)の評価をいただき、次回改定に生かす予定である。
- 「学校がわかる本」の制作を契機として、知多半島を生活拠点としている定住外国人のための「生活ガイド」などのやさしい日本語資料の作成依頼をすでに複数件いただいている。また、「学校がわかる本」の評価に関わってくださった有識者の方々を中心に、知多半島全体の「地域の日本語教育」を見直す動きが始まり、2019

年3月1日に70人ほどの関係者が集まる「知多半島 地域の日本語教育サミット」が日本福祉大学のまちづくり研究センターと日本語教育センターの共催で行われることになった。今後、「日本語教育知多半島モデル」を目指して、行政と外国人住民の間のコミュニケーションや日本語教育に関する研究を続け、日本人と外国人が平等参画する共生型の知多半島づくりに貢献していく。